

## 退職のご挨拶



応用生命化学科 食品生化学  
東 徳洋

兵庫の山奥で生まれ育った私には北関東は未知の世界でしたが、昭和63年10月（平成まであと3か月）に菅野長右門先生に招かれて、当時の畜産学科（畜産物利用学）に助教授として赴任いたしました。程なく学部改組が行われ、生物生産科学科（食品生化学と改称）、さらには現在の応用生命化学科と所属は変遷してまいりましたが、赴任以来30年余り、途中2年ほどカリフォルニア大学での充電期間も含め、変わることなく乳成分の機能に関する研究に携わってきました。卒論から40年以上にわたる研究生活で乳に教えてもらった事は、乳児には母乳が最適なものではあることはいまでもありませんが、成人にとって、乳・乳製品は生活習慣病の予防に最も優れた食品の一つであるという事です。乳には骨粗鬆症予防効果をはじめ、生活習慣病の入口である肥満を抑制する効果、認知症予防効果、心血管疾患の抑制効果etc.、etc.があることが次々と明らかにされており、最近の21か国13万6千人にも及ぶ大規模疫学調査では、乳製品の摂取量増加と生活習慣病による心血管疾患リスク低下の関連が明らかにされています。1日2食以上の摂取で有意なリスクの低下が認められていますので、皆様も乳・乳製品で生活習慣病予防に努めていただければと思います。

赴任当初は環境のギャップによるストレスから、十二指腸潰瘍を患ったこともありましたが、しだいに居心地の良さを感じるところとなり、その後は大禍なく、結局これまでの人生の半分はここに居座って過ごすことになってしまいました。しかしながら、ここ5年ほどはちょっと窮屈な違和感を覚えています。去りゆく者として、他の学部はどうあれ、農学部はこれからも、自由度の高い（地域何とかにのみこまれることなく）農学部であり続けてほしいと願っております。

今のところ退職後の予定はなく、しばらくは高等遊民として過ごそうと目論んでおります。最後に皆様の健康とご多幸、宇都宮大学農学部のますますの発展を祈念して退職の挨拶といたします。



生物資源科学科 地質学研究室  
相田 吉昭

昨年の春から引き続いている新型コロナ禍はパンデミックとして依然として猛威をふるっております。昨年度は私にとって現役最後の教育研究の年でしたが、講義のほとんどがメディア授業として行われましたことは、これまでに経験した事の無い特別な年でありました。

さて私は1991年4月に本学に着任してから30年間にわたり研究教育に携わり、本年3月末をもちまして定年退職いたしました。前任校の期間を加えると大学教員として36年9ヶ月の長きにわたり教育研究の場で充実した日々を過ごすことができました。この間、生物生産科学科植物生産学コースおよび生物資源科学科において、多数の教員の方々や事務職員の方々、そして技術職員の方々に大変お世話になり本当にありがとうございました。

地質学研究室では、フィールドを研究の場として栃木県内や日本国内のみならずニュージーランドの地質を解明するためにニュージーランド（NZ）のフィールド調査を毎年継続して行ってきました。学部学生や大学院生諸君を連れてNZの野外地質調査を現地の共同研究者と共に1週間～2週間一緒に体験することで、学生にとって何事にも変えがたい経験となることは、これまで沢山の事例を見てきました。とくに学生諸君がその後に取り組み卒論や修論研究に対するやる気が意欲的に変化してきます。一方、私の方では若い学生諸君のエネルギーを吸収して自身の活力を維持して研究を進めて来れたような気がします。学生諸君にいつも語っていることですが、伝統は受け継ぐだけでなく新たな伝統を自分たちで創りあげることが大事であること、NZのフィールド調査をしている時の自分が本当の自分の姿であり、生き生きと楽しく研究するために大学で頑張ってきたのかもかもしれません。

今後の宇都宮大学について語るとすれば、地域に貢献する大学であれと自己規定するだけではなく、グローバルな視点をおいた海外にも飛躍できる大学であって欲しいと期待しておりますので、農学部のさらなる発展をお祈りいたします。私自身は農学部の非常勤講師として専門科目と教職科目を引き続き担当しておりますので、どうぞよろしく願います。これまで長い間、本当に有難うございました。

